日眼会誌　129巻　4号

YOCコラム

Young Ophthalmologists Committee Hot Topics !

Instagram

若手医師国内交流プログラム参加報告 Part 1（神戸アイセンター病院・杏林アイセンター）

日本眼科学会戦略企画会議第二委員会
Young Ophthalmologists Committee

第1回，第2回のコラムでは，主にYoung Ophthalmologists Committee(YOC)の取り組み全般についてご紹介してきましたが，今回から数回に分けて若手医師国内交流プログラムに実際に参加した報告をご紹介したいと思います．今回よりご覧になっている方に説明させていただきますと，若手医師国内交流プログラムはYOCが企画し，国内の若手医師同士の交流を促進し，刺激を受け，研究などへの関心を高めることを目的とし，ネットワークを広げ新しいイノベーションが生まれる基盤を作りたいと創設されました（第1回の募集は終了しています．なお，第2回の募集は2025年度に実施する予定です）．2023年秋に，本プログラムが本格的に始動する前にYOCメンバーの一部が試験的に他施設を訪問してきましたので，その報告書をご紹介させていただきます．今回ご紹介させていただく以下の内容は，2023年の第77回日本臨床眼科学会でYOCシンポジウムの一部としてご紹介させていただいたものとなります．

神戸アイセンター病院を見学して
北海道大学　福津佳苗

私は若手医師国内交流プログラムの試験運用として，2023年9月に3日間，神戸アイセンターへ見学に伺いました．同施設へはもともと日帰りで見学に伺ったことがあり，最新の研究機器や設備を有している点，網膜変性外来や遺伝カウンセリング，ロービジョンケアが日常的に行われている点に興味を惹かれ，そして全盲スタッフの方から最新のアプリ等を活用した日常生活の過ごし方についてのお話を聞き感動した経験から，ぜひもう少し長い期間見学をしてみたいと考えておりました．折よく，若手医師国内交流プログラムの試験運用でYOCメンバー数名を国内施設へ派遣する話が持ち上がり，改めて見学を希望した次第です．

今回は主に網膜変性外来，遺伝カウンセリング，ビジョンパーク，そして研究施設を見学させていただきました．まず，網膜変性外来では髙橋政代先生と前田亜希子先生の外来を陪席いたしました．疾患や最新の治療情報に関しても勉強になったほか，一人一人ゆっくり時間をかけて患者さんと向き合う外来で，髙橋先生の「見えなくなってもこういう方向もあるよ，と考え方の角度を変えてもらえるような外来にしたいと考えています」というお言葉が大変心に残りました．遺伝カウンセリングも初めて陪席し，カウンセラーの方が「なるべくポジティブになる伝え方を心掛けています」とおっしゃっていたことが印象的でした．また，神戸アイセンターでは，ごく日常的に多職種による連携が行われている点にも感銘を受けました．次に，ビジョンパークはとてもおしゃれな，皆のために開かれたスペースでした．ロービジョン関連の情報提供を行うほか，皆が使えるボルダリングスペースやキッチンもあります．勤務されている山田千佳子さんにお話を伺い，視機能が低下してきた方々に対して「困っていることないですか」よりも「何をやってみたいですか？」と声かけをし「できないから諦める」ではなくて，やりたいことを実現するためにどうするかを一緒に考えたいとおっしゃっていたことが大変心に残りました．最後に研究施設ですが，「開かれた雰囲気」というのが第一印象でした．たくさんのオープンスペースがあり，自由にパソコンでの作業や打ち合わせができるようになっていました．また言わずもがなですが，大変充実した機器が揃っており，研究を行っている身としては見るだけで大変テンションが上がってしまいました．研究専属の視能訓練士である山本さんには臨床研究で使用している多数の画像機器について教えていただきました．週一回の抄読会にも参加させていただき勉強させていただきました．たくさんの大学院の先生たちともお話でき，さまざまな大学から集まり，多彩なバックグラウンドを持つ人々が同じ施設で研究をしている姿に，施設の垣根を越え叡智を結集させる研究環境の素晴らしさを感じました．

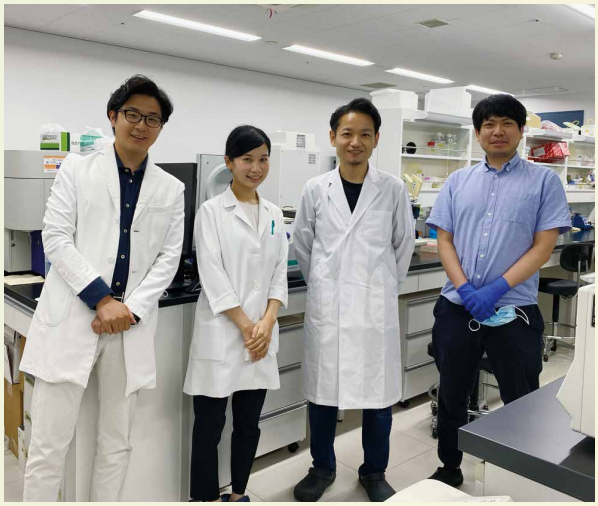

写真
大学院生(2024 年当時)の先生方と．左から酒井大輝先生，福津佳苗，岩間康哲先生，尾崎篤汰先生．

さて，3 日間の見学を終えて感動とともに帰宅しましたが，自施設に戻ってからもその感動は冷めやらず，まずはロービジョンケアに興味を持ち，2024 年に視覚障害者用補装具適合判定医師研修会を受講し勉強を始めました(まだまだ途上ですが…)．また，本見学でお世話になった大学院生の酒井先生(神戸大)は 2023 年末に北海道大に見学へ来てくださり，当時大学院生をされていた岩間先生(大阪大・現在ご留学中)は私の留学計画に際し助成金獲得のアドバイスもしてくださいました．他施設見学によって得られるものは大変多く，さまざまな先生方が臨床・研究に向き合う真摯な姿に触れることにより，知識や見聞を深めることはもちろん，新たな視点で物事を見るきっかけになると感じました．また，他施設に赴くことで生じる人的交流も，今も上記のように交流が続いていることからも，大変有意義であると実感しました．

今回このような貴重な機会をくださった日本眼科学会理事の皆様，未熟な自分の見学を受け入れてくださった神戸アイセンターの皆様，そして見学を快く後押ししてくださった石田教授をはじめとする北海道大眼科医局の皆様へ心より感謝を申し上げます．

杏林アイセンター網膜硝子体(VR)フェローシップ

金沢大/かなざわ土屋眼科　土屋俊輔

私は普段より手術教育の課題を感じることが多かったため，杏林アイセンターの網膜硝子体(VR)フェローシップの噂を聞きつけ，是非この眼で一度見てみたいという強い希望で今回，国内交流プログラムの試験運用にて見学させていただきました．

ご存じの方も多いと思いますが，杏林アイセンターでは，海外では一般的な眼科初期研修修了後の専門研修の一環として網膜硝子体フェローシッププログラムを設立しており，全国から多くのフェローが集まり，集中的に網膜硝子体手術を学べる貴重な機会を提供しています．

実際に訪れてみると，その名声のとおり，周辺地域から多くの手術症例が集まり，フェローの先生方は非常に多忙ながらも，充実した研修を受けてらっしゃいました．特に近年症例数が減少している強膜バックリングも，杏林アイセンターでは数多く経験できる環境が整っていました．また，フェローの先生方が“お客様”として扱われるのではなく，網膜硝子体チームの一員として手術の最前線に立っている姿が非常に印象的でした．

実際に見学をして感じたことは，もちろんそれぞれの所属する組織で研鑽を積むことが重要であることは言うまでもありませんが，より集中的に専門的知識を学ぶという意味では，症例数が圧倒的に豊富な施設がフェローシッププログラムとして募集し，スペシャリストを育成し，また元の施設や，専門医が不足している地域などで活躍するということが非常に効率的であるように感じました．地域によっては一つの施設ですべての専門分野のトレーニングを行うことは非常に困難となってきているように感じますので，このようなフェローシッププログラムが全国に数多く存在すれば，研修する機会の少ない若手医師にとっては非常に魅力的になっていくのだろうと思います．さらに例えば，フェローシッププログラムを修了してはじめて subspeciality を標榜できるようになれば，質の担保にもつながるのではないかと考えました．

今回の見学では多くの学びがあり，フェローの皆様との交流を通じて大いに刺激を受け，新たなアイデアが生まれるきっかけにもなりました．是非興味がある先生方は，若手医師国内交流プログラムに応募していただけると幸いです．

最後にはなりましたが，今回の国内交流プログラムに関して，派遣を了承していただいた当教室の杉山和久名誉教授，快く受入れてくださった杏林アイセンターの井上　真教授，VR フェローの先生方にはこの場を借りて深く感謝申し上げます．

(文責：土屋俊輔)